

秋季ビーチクリーン ナップの報告

小田島厚
(東船大N15)

この処、目が覚めるとやっと秋の気配を感じるようになって来ました。9月16日は鶴沼海岸ビーチクリーニングの日である。起床して、窓を開けるといつもの強烈な太陽が既にサンサンと照っているのではないか。雲一つない好天気である。今日もまた猛暑か。今年は、何故か彼岸を目の前にして未だ猛暑が続いている。いつになったら治まるのだろうか。

3連休の谷間、30度以上の猛暑続き、多数の欠席電話と良からぬ条件の下、果たして今日は何人参加してくれるだろうか、10人来れば上出来か、といろいろ愚考しながら現場に向かった。途中、雲が広がり始めて来たので喜々としてもっと広がるよう“Knock on wood”の祈りをしたのが効を通したのか、全天曇天となった。暫くしたら今度はポツリポツリと雨が降り出すではないか。まだ作業開始前である。徐々に雨足が強くなって来たので別な心配が過る。雲の動きを見たら止みそうでもある。本部は、止むと読んで“Go”と決定。さすがは本部、幸運にも10時の開始前には雨も上がり、予定通りの決行となった。11時30分の終了まで雨も降らずいつもの通り無事終了した。

サッポロビールグループが会社独自でグリーン運動をするという理由でJeanを脱退した現在、参加総人数は減ったが、それでも今回の参加者総勢は200人位か。海洋会も予想を上回り、12名の参加となった。戸荻清氏紹介の辻村京子様に参加を頂き、また、東京海洋大学が現在試験期間中なのに2名の学生(丹澤俊介君、大橋広弥君)が参加してくれた。今回のこの厳しい条件にもかかわらず、ボランティア精神のもと、参加協力してくれた3名の方には、只々謝意を表したい気持ちで一杯である。

海岸の美化清掃から始まったこのビーチクリーニングは、回収・処理ばかりに重点を置いても年々多量化するゴミ問題の根本的解決にはならない。発生源を絶つことが必須である。長年にわたる調査の結果、他国から漂流するゴミの量が多く、単

なる美化運動では解決不可能との判断、地球規模の環境問題にまで発展し、環境保全の課題は年々広がってきている。そのため、いろんな国のいろんな分野に話しかけ、ゴミ発生を絶つための人材育成、環境保全教育、啓発活動等を進める必要がある。環境庁が中心となってこの問題を他国と共有しながら、ゴミの量を少なくする整備対策を進めるべきである。

余談になるが、東日本大震災で発生した瓦礫が現在太平洋を漂流中である。航行中の船舶の安全航海に影響する事はもちろん、漂着先に多大な被害を与える事は避けられない状況である。これらを我が政府はどうしようとしているのだろうか。心配である。

さて、海洋会の参加人数だが、年々減少傾向を辿っている。最盛期は総勢30人位だったが、今はその半分にも満たない状態である。

勧誘にあの手この手と働きかけているが、思いの外、実ってくれない。我々の住む環境を綺麗に、住み良くしようとする会員皆様の士気と雄志を期待する次第です。

今回の参加者は、以下の通りである。(敬称略)

橋本 進、戸荻 清、北沢昌永、安田岩男、早津義彦、眞那子金三、辻村京子(特別参加)、大内孝利(海洋興業)、上村治稔(ウイングマリタイム)丹澤俊介(海洋大学)、大橋広弥(海洋大学)、小田島厚

